

日本人学校・補習授業校 タマテバコ

トビラを開けたら、いろんなものが見えてきた……



ダラス補習授業校の挑戦への支援

AG5運営指導委員会委員長 日白大学長 佐藤郡衛

文部科学省からの受託事業「在外教育施設の高度グローバル人材育成拠点事業」(略称AG5)プロジェクトの打ち合わせのため、ダラス補習授業校を訪問しました。当地域は、日本の大手自動車メーカーによる北米の本社機能移転によりいま大きく変わろうとしています。補習授業校も例外ではありません。今回は、このダラス補習授業校の取り組みと今後の支援策について紹介します。

多様化する子どもへの対応

いまダラスは活況を呈しています。大手自動車メーカーの北米の本社がカリフォルニア州からここテキサス州プレインノ市に移転したためです。関連する日系の企業も移転してきますし、駐在員とその家族もこの地に移動することになります。二〇一七年四月時点のダラス補習授業校の子ども数(幼稚園部、高等部を含む)は四七九名でした。しかし二学期が始まった八月十九日時点で五〇〇名に達したということです。同社や関連企業の移転がこれから本格化するということ、さらなる子どもの増加が予想されていて、子どもの多様化がいつそう進むということです。

ダラス補習授業校が掲げている目的は「ダラス周辺に住む日本人の子どもが、将来日本に帰国し、日本の教育に移行する際に学習上の障害を少なくすること」「日本語を継承言語とする子供達で、日本語力の維持向上を希望する子供達に、より適切な日本語の学習機会を提供すること」の二つで、これらは子どもの多様化に対応したものになっています。

今回、校長の村上先生にコーディネーターいただき、授業参観のほか先生方や運営委員会の皆様と協議させ

全校挙げての取り組み

ていただきました。こうした場から学校の特徴や課題が見えてきました。

今回の訪問でまず感心したのが、子どもの実態に即した授業づくりを全校挙げて試みようとしていることです。全校共通の研究テーマ「グローバル環境の中で、個のニーズに応じた学力を身につけ、国際人として成長しようとする児童生徒の育成」を設定し、幼稚園部、小学部下学年部(小一〜三年生)、小学部上学年部(小四〜六年生)、中等部、そして国際部で研究を行っています。週一回の補習授業校ですから日本国内の学校とは異なりますが、時間のないなかで研究授業を行い、それをもとに研修を深める取り組みを行っているという点は注目に値すると思います。

【幼稚園部】

幼稚園部では、子どもの多様化が進んでいます。園児数の増加と共に、園生活を送るうえで日本語力が十分でない子どもが増え、入園後の指導に困難を来すようになったということです。このため入園テストを行っています。研究テーマは「幼稚園部の園児が皆の前で発表する経験を通して、自分の考えをしっかりと伝える力を身につけることができるように

指導する」ということです。具体的には、自分が大切にしているものや、家族の写真一枚などをもとに皆の前で発表するといった取り組みです。家庭や現地校の学習のhow and whyとの連続性もあり、子どもの日本語力を伸ばすうえで効果的な試みといえます。

【小学部】

小学部下学年の研究テーマは「異学年との交流を通して話す・聞く力を高める指導の工夫」です。具体的な取り組みとしては、二年生がおもちゃのつくり方を一年生に説明し、一年生がかならずおもちゃをつくることができるようにするという実践があります。これは、家庭での日本語のコミュニケーションが限定的であり、きちんと話さなくても理解してもらえない状況にあり、相手にきちんとわかるように伝える取り組みが必要だという背景があります。ことばの力をつけるうえでたいへん重要な実践といえます。

小学部上学年の研究テーマは「書く力の育成」です。上学年になれば国語力の差も大きくなってきます。たとえば国語の物語文では、子どもによっては語彙力や理解力不足もあり、その面白さがわからないという問題を抱えているということです。

上学年では、「クラス作り、仲間作り」に主眼を置いていて、授業の多くで意見交換を行っているということでした。授業参観をした小学六年生のクラスでは意見文を書く授業でしたが、ある女兒の「戦争のない平和な未来」という意見文は内容も素晴らしい、清書した文も丁寧に書かれました。このほか社会科については、日本の背景知識がないため学習が難しいという問題もあるということでした。

【中等部】

中等部の研究のテーマは、「習熟度と到達目標の差のある生徒たちへの指導工夫と実践」です。中等部となると、やはり日本語力の程度と進路によって、授業の焦点の当て方が異なってきます。中学部については、日本語力に差がある生徒が一緒に授業を受けているため、指導の難しさに直面しています。習熟度別の指導をどのように行っていくかが課題になっています。また、少ない授業日数のために教科書の内容の精選も課題です。今年度から学年を超えて研修会や研究授業を実施して情報を交換できるように、今後は自分の担当教科にその成果をどう活かしていくかが課題だということです。高等部は科目選択制をとっています。

す。数学、国語があり、それぞれ「基礎」と「発展」のクラスがあります。「発展」は「基礎」を二年間履修しないと受講できないことになっています。このほか、「表現基礎」と「メディア時事」という科目もありますが、「メディア時事」については表現基礎を履修し、かつ新聞記事が読める国語力が必要ということです。大きくいえば、「基礎」は永住者向け、「発展」は日本に帰国受験に対応するコースといえます。進路により科目選択制を導入しているのが特徴といえます。

【国際部】

国際部は、一九九〇年十月に発足し、すでに三十年近い歴史を持っています。研究主任でもあるウッドワード先生がこの国際学級を牽引してきました。国際部とは、「国語学習の基礎となる日本語がまだ育っていない」子どもが対象です。具体的には①日本への帰国予定はほばない、②日本語が第二、第三言語である、③日本語環境はあるが、継承語としての日本語取得のためには十分でない、④友達や大人との簡単な日本語の会話はできるがスムーズに会話をすることは難しい、⑤電話での日本語会話は難しい、⑥日本語のTVや映画を楽しめるが内容をすべて理解するのは難しい、といった子どもを

対象にしています。現在、国際Ⅰ(小学部四年学齢相当まで在籍可能)、三年間を上限)、国際Ⅱ(小学部六年学齢相当まで在籍可能)、国際Ⅲ(中学部三年学齢相当まで在籍可能)、国際Ⅳ(高等部三年まで在籍可能)の四つのクラスがあります。各クラスの日本語力の判定基準、「継承語」としての日本語学習のカリキュラム、そして教科書や地理歴史など簡単な日本語でわかる視聴覚教材の作成などが課題になっています。

【JSLの取り組み】

ダラス補習授業校の特徴と課題についても一つひとつでも紹介したい取り組みがあります。同校の運営母体は日本人会の教育部会ですが、その教育部会は地域の住民を対象に「JSL」(Japanese as a Second Language)と呼ぶ日本語教育を行っています。レベルから六まであり、一年間で全四十時間の有料のコースで、補習授業校の開催日に合わせて授業が行われています。地域住民に対する日本語教育という試みもまたたいへん興味深いものがあります。

教育上の課題とその支援

ダラス補習授業校では、全校挙げて日本語力向上の取り組みを行っています。しかし学校による調査では、

個別指導で対応しないと十分についていけない子どもが各クラスに三、四人程度いるということです。その大きな要因として「日本語の習得および読解力がない」などの日本語力不足を挙げています。そこでAG5プロジェクトでは同校と共同して、言語力、思考力のもとになる日本語力の向上を目指した補習授業校のプログラム等を開発し、それを実践していただきたいと考えています。具体的には、国語の支援、日本語力の向上をねらった教科横断型のカリキュラム等の開発を行います。また国語の教材についての背景知識や体験の不足のほか、社会科では子どもが具体的なイメージをしにくいといった課題も指摘されました。これらの課題にこたえるために、デジタル教科書等を活用した単元開発を行い、その教材と効果的な指導法の開発なども行っていきたいと思っています。こうした教材等を実際に使っていたら、成果を検証していきます。このほか、近隣の補習授業校間での共同の実践や教員同士の交流の場などもつくれないかという提案をさせていただきました。

今回の訪問は実り多いものになりました。これからのAG5の取り組みの進捗や成果については本欄でお伝えしていきます。